学界情報

The 2005 International Power Electronics Conference: IPEC-Niigata 2005

April 4-8, 2005, Toki Messe, Niigata, Japan

概　　要

2005 年 4 月 4 日から 8 日までの 5 日間，IPEC が電気学会主催で新潟・朱鷺メッセで開催された。この国際会議は今回が 5 回目であり，パワーエレクトロニクスを中心とした国際会議として世界的にもよく知られた会議へと発展してきている。本国際会議はこれまで首都圏で行われてきたが，今回初めて首都圏から出て新潟で行われた。ご存知のように，昨年 10 月 23 日新潟では中越地震が発生し，大きな被害を出したこともあり，詳細な情報が伝わるまでは開催を危ぶまれた方も大勢いたのではないかと思う。結果的には，無事開催することができ，論文投稿数も 458 件となった。論文の総発表件数が 310 件であり，そのうち海外からの発表が 106 件であった。また，参加総人数が 551 名（同伴者を除く）であり，海外から 129 名の参加があった。日本以外で参加者数の多い国は，アメリカ合衆国が 19 名で一番多く，その次に台湾とタイ国が各々14 名，韓国 11 名，ドイツと中国が各々10 名そしてイギリス 9 名と続く。会議は，14 の organized sessions を含む 74 の technical sessions で構成された。

今回の会議では，主催者側が初めて会議開催中昼食をサーブした。会場周辺には大勢が一度に食事をするところが見あたらなかったので，これは正直参加者にとってはよかったことである。ヨーロッパで行われる EPE などでは昼食時間が長く，しかもワインがでるなどかなりリラックスしたひとときを過ごすことが出来るが，登録料やお国柄の違いもあり，個人的にはこういうスタイルも好きではあるが，日本では賛同を得るのはまだ難しいであろう。

Isao Takahashi Power Electronics Award の創設

Award としては，First, Second, Third Prize Paper Awards があるが，この IPEC-Niigata 2005 ではパワーエレクトロニクス分野で多くの業績を残した故高橋　勲先生を称え，高橋　勲賞が創設された。20 名（国内 9 名，国外 11 名）の応募者の経歴，IPEC 発表論文，3 件以内の代表論文について難波江先生を選考委員長とした 5 名の審査委員で審査し，候補者を 6 名（国内 3 名，国外 3 名）に絞った。次に，二次選考委員会で清水論文委員長および海外の著名な研究者 4 名の投票により決定した。本賞受賞者は以下の通り（敬称略）である。

Uwe Drofenik
Swiss Federal Institute of Technology(ETH) Zurich, Switzerland
Hideaki Fujita
Tokyo Institute of Technology, Japan
Christian Klumpner
University of Nottingham, UK

会議に参加して

仕事の都合で 5 日夕刻に到着し，6 日から会議に参加したので，Opening Ceremony や Keynote Speeches には出席できなかった。翌 6 日朝に設定されてあった Plenary Speeches は拝聴することが出来た。8 時 30 分からの講演であったが，多数の聴衆が参加していた。会場はどの部屋も広く，余裕を持って座ることができ非常に快適であった。この日は筆者自身も Prof. Bose とともに座長の役割を行うことになっていたので，久しぶりに少し気合いが入って会場に行ったのだが，Prof. Bose は筆者以上に気合いが入っており，ほとんど出る幕はなかった。しかし，質問も多く内容的にも充実した session であった。

7 日 8 時 30 分から“Electric Motors for EVs/HEVs”というタイトルの Organized session が開催された。早朝にもかかわらず非常に熱心な多数の聴衆がおり，電気およびハイブリッド自動車関連のモータ技術には多くの関心がなお注がれていることがうかがい知れた。PM モータおよびそのドライブに関連する session にも参加したが，多数の参加者がおり，モータ関連技術に世界の多くの研究者，技術者が目を向けていることがわかる。また，同じ 7 日の午後 2 時から，実行委員長の赤木先生自らご提案の“Special Seminar on Technical English Writing and Presentation”には多数の日本人が参加した（写真参照）。筆者自身を含め Writing & Presentation を少しでも向上させたい気持ちを皆持っているということがよくわかる会場の熱気であった。このような試みは国際会議では初めてであると思うが，日本で実施する意義は大きかった。英語での Writing & Presentation のための講演であるのに講演者はすべて英語で話すというのが国際会議らしく，日本以外の英語圏でない国の方々も参加していた。それにしても，トップバッターの Prof. Habetler の声やジェスチャーには迫力があり圧倒された。

最終日 8 日の午後 4 時から，“Special talks”として，矢野昌雄先生，Prof. Francesco Profumo，Prof. Bimal K. Bose の講演があった。最終日の最後の session であることから参加者数が極端に少ないのではないかと危惧したが，杞憂であった。たくさんの方が参加し，熱心に講演を聴いていた。本国際会議の最終の講演者となった Prof. Bose は時間を忘れるほど熱心な講演を展開され，最後は時間切れで少し残念そうであったが，講演を巧みに総括され終了した。

Special Seminar

三木　一郎（明治大学）
（平成 17 年 5 月 26 日受付）